
すずむし

SUZUMUSHI

Vol. 5 No. 7

1955年 7月

倉敷昆虫同好会

目 次

矢の峰採集記	小野 洋	(1)
皿ヶ嶺 採集記	近藤 光宏	(3)
おとしぶみ		
◦ 福山山頂一帯にホソ ハンメヨウ多産	広瀬 義躬	(5)
◦ 西大野近隣産カミギ リムシヨ種	赤 枝 一 弘	(5)
◦ 春生ギマダラヒカゲ の早期発生	小野洋・広瀬義躬	(6)
◦ 朽木を食するカスト ムシ幼虫 (3)	赤 枝 一 弘	(6)
編集後記		(6)

矢の峯採集記

小野洋

冷い風が車窓から一ぱいに吹込んで来て、未だ眠むさうなまなこを覚ましてくれる。溪谷と山の緑がいろいろに乗り合いもつれ合いながら流れ去って行く。霧が透くたれ、山も眠っているようだ。

倉敷駅から伯備線に乗り込んだのがら時20分。北上する時は大抵この列車である。今日は矢の峯と言う未知の山へ登ることになっているのだが地図を出して見ると、新見市の北部にあつて標高は900m余り、コースによってはなかなか急な坂が続くようだ。今日はもう7月の引日。やっと開放された心地がする。新見駅へ降りたのが7時10分頃、ここから備北バス千屋行7時50分と言うのに乗った。バスの中で、運転手の方や土地の方にこの山についていろいろと親切に教えていただいた。坂本と言う所で降りた方がよい。割合に峻峻？で迷い易い。頂上は非常に眺望がいい等々とである。降りてからも土地の方に、谷を渡ったら左へ左へとるように言われたが、これが殊に役立った。ミンミンゼミとアアラゼミが油ぎった声をほりあげている。キチョウヤルリシジミが足元を飛び交う。降りてから真直ぐに道をとつていたところいやに道が狭くなって、小さな尻太を組んだ梯子のようなものの上を歩くようになって来た。妙な山道だ。どうも、初めから大へんなところである。やっと緩かなところへ出そうなので、ほっとしたが、なんとそこが行き止まりで、2,3人の薪を切り出していた人達が、異様ないでたちで、のこのこやって来た小生の方を不審そうな眼差で眺めていた。直ぐに正しいコースを示してもらって初めから登りなおしたのほ言うまでもない。“左へ左へ”を教えてもらったのはそれから後のことである。木陰にクロヒカゲ、ヒメウラナミシヤノメが多い。谷川にはカラスアゲハやオナガアゲハの雄姿が見られた。イヌザンショウに産卵に来ていた雌も居た。急な坂がどこまでも続く。ニワハンミヨウが人を馬鹿にしたよけの舞をして、ツバと先へ飛んで行く。エカハルゼミが一匹だけないてい

るのに出会った。左へ左へを守って進むが、成程分れ道の多い事。どうやら本コースを動いているようだ。シヤクががよく横切る。キンモンエダシヤクが沢山いる。汗は流れるが、やっとな少しばかり涼しくなった様な気がする。大分澄ったらしい。ウラギンシジミヤムラサキシジミは活潑に木間を飛び。いつも出てくるのは、コミスジとイチモンジチヨウだ。アサマはまだ見ない。コチヤバネセセリやキマダラセセリがめまぐるしく飛び。もう一時間以上も澄って探して来たが、めばしいものは一向に現れない。脚を下して小休止、こゝで飲んだ考茶は又一入うまかった。ボロボロのウラナミジヤノメが出て来た。この時期に乗るとこいつは大抵ボロボロになったのしか、お目にかかれぬ。左へ左へ道がどこまでも続く。いゝものは採れないし、うんざりして来た。又気をとりのおして進む。セアカツノカメムシとチヤイロチヨッキリに似たゾウムシを採った。突然右側下方にぽっかりと大きな穴が見えた。黒々と人を吸い込むような恰好で口をあげている。バスの中で聞いた古い鉱坑らしい。のをいて見ると縦にずっと深く、暗黒が続いていた。エゾハルゼミの聲が盛んになって来た。遂に頂上に達した。丁度正午も近かったので、昼食にした。風が強く、泳めぬ。よくどこでも見られるように、こゝでも頂上にキアゲハが居た。こゝの頂上は広島県の道後山を少しばかり規模を小さくしたようなもので、木がなく、一面の草が続いていて寝転ぶと気持ちよい。時に放牧をするようである。1時過ぎには降り始めた。ホシミスジが居たので捕える。少し降るとセミの聲がヒゲラシに変わった。アオバセセリを網にして、なおも目を光らせていると、葉上にホシチヤバネセセリを認めて網に入れたが、とたんに急に吹いて来た強風に網を裏返され、セセリは逃走した。下手をしたものだ。ゴマダラシロエダシヤク、チヤマダラエダシヤクを採って更に降りる。坂が急なので降りるのも楽でない。再びミンミンゼミの聲が聞えぬ。又暑くなったが、水筒のお茶はとっくになくなっている。のどが渴いて来た。横倉からヤコンオオムシが走り出たので捕えた。谷川が近くなると又、カラスアムハなどが飛出してくる。ルリタテハも元気がよい。エグ

11ドラカミキリを管瓶に入れて降り続ける。麓が近くなりスジグロシロク
ヨウが見られるようになった。

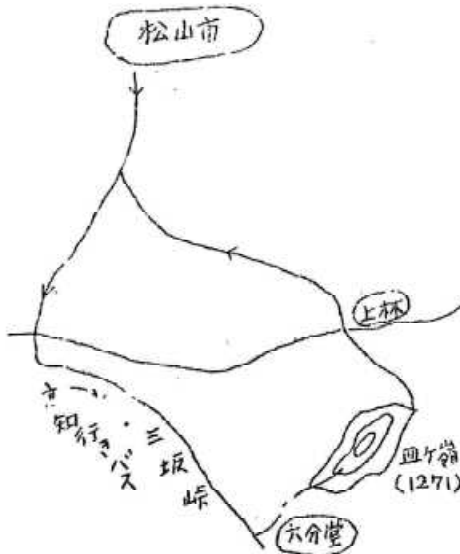
バスで午後4時には新見に着き、4時18分に新見を発車、6時2分には
はや倉敷駅へさすやかな土産物を持って降り立った。

皿ヶ嶺 採集記

近藤光宏

先づ皿ヶ嶺を御紹介しておきましょう。

〔1〕
“愛媛県松山市の西南、標高1271米。同市を早朝出れば日帰りができる。
頂上は草原で少し下ればアサギ等の潤葉樹林が続いている、この山はミ



ヤマカラスアゲハ、スジハソヤマ
キクヨウ、フジミドリ、ミミ、ア
カセヒリ、エゾハルゼミ、コエゾ
ゼミ、テシアアワフキ、ニヒラ
タムシ、キクカマキリモドキ、ム
カシトンボ等相当面白いものが採
れている”それに岡山県下では
まだ記録されていないと思うが、
クロコノマクヨウ、ナガサキアゲ
ハ、イシガキクヨウ等、此の附近
でも採集出来る。

さて筆者は、1954年11月23日(勤労感謝の日)同僚の岡田氏と共に、前
々から計画していた皿ヶ嶺を踏破した。11月とはいえ天気ばかりは極めて
よく、暖い一日であったが、何分虫相に乏しく、只採集というよりも登山
に傾動されてしまった。しかし持物は申すまでもなく、少くとも筆者自身
として、当山をもって四国山脈を代表し、倉敷地方のそれに比較する時始
めて、筆に意を加えるものと考えられ、以後、道を通った記行文になるが

そのつと比較的考察をもつて記したいと思う。(山に海あれば不眠のない男、それが書くのだから内容もしれてよいが)。

二人並んで高知行きのバスに座る。キップはすべて道中車内で求める事になっている。しばらくして、車掌が現れる。その顔は現在までの無事故を物語っている。エンジンの音と共にやがて早朝の駅を後に出発、一挙に道後平野を南下し、水のない大きな川(重信川)を渡り30分もすると、やや上り坂になる。車掌が、こちらをむき、アゴひもを、はずしながら「皆さん、只今より三坂峠にかかります。車の動揺により棚の荷物、急停車に際して、ハンドルから手を離さない様に」などと客を緊張させ、それから運転手の経歴を言つて又安心させる。やがて柿園にさしかかるとバスが止まる。客が柿を買うのである。こうして峠の600米位に達する。耳鳴りがする。その間昆虫らしきもの一こう目にとまらず、今が好期ならと、血りの樹木を見て想像するだけ。平野は谷底から海岸に拓がる。平野の後を標高100米の山が取巻いている。少くとも岡山県南部に於ては見られない。書きながらも怒を通して、頂の皿形に雪をいただいた当山を望むことが出来る。六分堂で下車。道はすでに下り坂になっていた。陽を背に受け、谷川に沿つて登つて行く。常に口からは白炭を入れながら、くぬぎの落葉を踏しめて。岡田氏は盛んにガガンボの類を採集していた、あまり又山採るので聞いて見た、すると、「これをアラウン氏(米国)に送り、お礼に本をもらう」どの事、そこで筆者も採集することにした。頂に到達した頃には、ビンの中はガガンボで一杯になっていた。

頂上の草原の中では、バッタ類が、キチキチ音をたてている。その音からしても、かなりいる様である。その他、蛾、微小甲虫の類が飛んでいた。此處で身のまわりを整理し、少し下にあるキャンプ場に降る。南から登つて北側に降るのである。火山灰の路になっている。山の北側は南側に比して遙かに急である。小さなスナ林の下を通過して岩道に変わる。冷たい風が、コケを通して吹いて来る。そこから一挙に上林に降り、途中小さな池に立寄ると、池に池の無いのは、意外である。この様にして、めつと終

車を降り、バスで6時間には、帰るまでが一杯に、(1950.5.10) 12

(1):石原 保 :新昆虫(1948.7)・Vol.1.No.4 P.37~38

採集案内 中国四国の好採集地(11)

おとしがみ

福山山頂一帯にホソハ ンミョウ多産

この地に本種の産することは、既に小野洋氏によって報告(本誌 Vol.4, No.6)されていますが、私は昨年7月13日、倉敷の北部山塊を歩いた時、本種が福山山頂一帯に広く分布していることを確認しました。即ち頂上の平坦地は勿論、浅原側登山路および水別側登山路にも頂上に近いところでは散間(生としてササ)に同行する本種を多数目撃することが出来ました。やはり当日の観察では、羽島山の場合と同じく、又従来言われている様に、本種は全然飛翔することなく、散間に敏捷に歩行するのみでした。その状態は一見大型の蟻類と酷似しますが、その歩行は更に敏捷であるので識別することが出来ます。注意していないと蟻類と間違えそ



うな桌、飛翔しない桌などが現在迄この地に本種の知られなかった理由として挙げられると思います。この桌から見て、倉敷周辺の山地にも本種の産する地域が少なからずあるのではないかと思います。

なお当日、目撃或は採集した個体はすべて会合部後半に赤褐長楕円紋を装わない var. *angustata* Fischer でした。

小野氏の報告を裏付ける意味で一付記しました。(広瀬義躬)

西大寺近隣産カミギリ リムシ3種

Pseudaeolesthes chrysothrix Bates
キマダラカミギリ

本種は西大寺に於ても非常に稀な種で1953, 8.2 芥子山に於て

6 (30)

メスバクイロ採取の記

Mesosa japonica Bates ゴマフカミキリ

1953. 西大寺高の高島君が西大寺市旧朝日村で1頭採取されているので報告しておく。

Waecha himaculata Thomson ヤハズカミキリ

デー月不明の標本が生物部に有る。比較的新しい標本らしいので報告しておく。(赤枝一弘)

春生キマダラヒカゲの早期発生

筆者等は昨年4月4日、和気郡熊山に採集に赴いたが、その際熊山の登山口ともいふべきあたりの松林で春生の本種1匹を採集した。

倉敷地方に於ける春生の本種の出現期は通常4月下旬で、現在迄に報告された最も早い出現日でも4月19日(1952年 於、総社)にすぎず、筆者等もその出現の早いには一寸驚かされた次第である。当日の状況は採集品、環境とも全く早春の感があり、それだけ筆者等には奇異に感ぜられたのであろうが、とにかく記録的な早い出現として一筆報告しておく。

いし野 一弘

朽木を食するカブトムシ幼虫(3)

1954. 3. 25. 再びカブトムシの幼虫をさがして見た。朽木をほらばらにする程調べて見たが昨年幼虫の残した多くの糞の他は見られなかったが、よくよくさがすと四個のぬけがらが出て来た。それで確実に成虫が発生したことが判った。しかしそれにしても昨年見た3cm 程度の幼虫はどうなったのであろうか又すぐなくとも四頭以上の成虫は再び卵を産みに帰って来たのであろうか。あの朽木がもはや朽すぎ又殆んど食する所がなくなった為かあるいは昨年一回だけ発生したのかも知れない。それにしてももう一度とあの朽木に於ては発生しないものと思われる。(赤枝一弘)

◇ 編集後記 ◇

本号には期せずして採集記が二編集まりましたのでそれを掲載しました。

すずむし 第5巻 第7号 昭和30年7月30日印刷
昭和30年7月30日発行

編集者 倉敷市住吉町 岡山大学農業生物研究所
発行所 害虫学研究室内

倉敷昆虫同好会